

王陽明の思想と六祖法寶壇經

久須本文雄

王陽明の思想と「六祖法寶壇經」(據國譯禪學大成本)に於ける六祖慧能の禪思想とに就て其の兩者の關係を少見せんとす。

陽明哲學の基調とする所は禪學と同じく唯心一元論的思想にして此の唯一絶對的なる統一的な本然的な靈體の實相を假名的に良知或は天理と稱謂せしなり。此の所謂良知は禪學に於ける自性或は眞如の當體にして六祖慧能の「無一物」、趙州の「無」に相當し尙、臨濟の「一喝」、徳山の「三十棒」、天龍の「一指」等は總て此の言詮不及底の妙體をより具體的活動的に表現せしなり。陽明は禪學の如く直接的經驗に依りて超越的靈體の相を端的に把住するも之を直下に最も具體的事實的に然も躍動的に提示する所、禪學に比し稍々稀薄にして迫力も乏しき如く覺ゆ。

王禪兩學共に異名同體たる良知或は自性を以て渾一なる絶對的極致を稱呼し總ての相對的概念的な思念を否定し亡絶せし最も直接具體的な實在を意味す。斯の如き實體たる良知は昭明靈覺の妙處たる本性即ち人心の本體を表詮すると共に萬物を生成化育する宇宙の本體にして造化の精靈なり。

心之虚靈明覺即所謂本然之良知也。(王文成公全書、卷二隆慶六年、謝廷傑編、三十八卷本)

萬物根源總在心。(全書、卷二〇)

良知是造化的精靈。(全書、卷二六)

「六祖壇經」に於ても

自心佛性、(付囑第一〇)

但識自本心、見自本性、(同上)

萬法盡在自心、(般若第二)

自性能含萬法、(同上)

於自性中萬法皆現、(懺悔第六)

とて超越的實在たる自性、佛性が自心の主宰となり根源となり亦、萬法を生成する宇宙の實體となる。陽明が心の本體を性として心性の主客體用の關係を説くは「壇經」に

心是地、性是王、王居心地上、性在王在、性去王無、性在身心存、性去身心壞、(疑問第三)

と記する如く心を地とし性を王として主從的相即關係を説く旨と符を合する如し。而して本體的良知が虚靈明覺なる妙相を具有するは自性が本來清淨靈妙にして圓明なる靈體なると揆を一にす。

何期自性本自清淨、(行由第一)

但見本源清淨覺體圓明、

(機縁第七)

良知或は眞如、自性が虚空の如く心量廣大無邊にして本來昭々靈々なる清淨的實相なるを以て

若主宰定時、與天運一般不息、雖酬酢萬變、常是從容自在、

(全書卷一)

未發之中即良知也、無前後内外而渾然一體者也、

(全書卷二)

毫髮不容增減、若可得增減、若須假借、即已非眞誠惻怛之本體矣、此良知之妙用、(同上)

内外不住、去來自由、能除執心、通達無礙、

(般若第二)

不斷不常、不來不去、不在中間及其内外、不生不滅、性相如如、常住不遷、名之曰道、

(宣詔第九)

法性本無生滅去來、

(付囑第一〇)

の如く通達無礙去來自在にして内外方圓聲臭無く然も増減生滅する事無き妙用を具現する事となる。陽明の所謂從容自在の妙境を「壇經」に於ては「般若三昧」(第二)とも「無念行」(第四)とも或は「一行三昧」(同上)とも稱して分別妄想を離脱し正直心を以て一切諸法に對してその儘を受用するを謂ふ。

良知の宿在する心と其の心が主宰する身とは不可離的關係にあるものにして禪學に於ては心身一如、性相一如、(性相如如「機縁第七」)と稱謂して物心の合一にして分離すべからざるを説く。

陽明も宇宙即己心にして其の心は萬化の根源をなし而して心は即ち理、理は氣と相即不離にして物心不二觀を提唱せしなり。而して宇宙間の一切萬物は悉く精靈的良知が具在し一物も良知の發用顯現に非ざる無きを以て人的良知は即ち一切萬物の良知で此の唯一絶對的良知の一元的觀點よりして天地は同根、萬物は一體となる。

人的良知就是草木瓦石的良知……蓋天地萬物與人原是一體、其發竅之最精處、是人心一點靈明

(全書卷三)

聖人只是順其良知之發用、天地萬物俱在我良知發用流行中、

(同上)

かく陽明が良知を主體として萬有の一體觀を提唱するは

物物皆有自性、

(頓漸第八)

令一切衆生一切草木有情無情悉皆蒙潤、百川衆流、卻入大海、含爲一體、衆生本性般若之智、亦復如此、

(般若第二)

一即一切一切即一、

(同上)

とて萬物普く自性を具有し此の自性、佛性に基きて一體觀を説く禪旨と相通するを覺ゆ。其の所謂「一即一切、一切即一」とは勿論本體と現象換言せば平等と差別の相即にして不離なる關係を提示せしもので陽明の説く所と類す。彼は

仁人之心以天地萬物爲一體、

(全書卷五)

とて仁愛の心より天地萬物を一體として觀察せしもので仁的同體觀は「大學問」(全書卷二六所收)等に詳説さる。陽明が仁愛の心より萬物の同體觀を説く所は「壇經」に於て智慧を四分せし所謂四智の中の即ち不平等の心病に苦惱する衆生を見て平等の大慈悲心を發起するを稱謂する平等性智の旨と相通する如し。

陽明の所謂心とは即ち理なるを以て心性を外にして理も無く事も無く物も存する事なく萬理我心に嚴然として具備せざるはなし。即ち

虛靈不昧、衆理具而萬事出、心外無理、心外無事、

(全書卷一)

天下無性外之理、無性外之物、

(全書卷二)

と説く心外無理の思想は禪の所謂心外無物、心外無佛の處にして

吾所說法、不離自性、……須知一切萬法、皆從自性起用、

(付囑第一〇)

於自性中、萬法皆現、

(懺悔第六)

とて一切萬法は心即ち自性を根源として顯現し此の自性を離れて萬法は存せざるとなす「壇經」の思想と相類する如し。

衆理、萬法を顯現しその根源的實體たる良知、自性は之を人格的に假りに表現して

人胸中各有箇聖人、

(全書卷三)

箇箇人心有仲尼、

(全書卷二〇)

本性是佛、離性並別佛、

(般若第二)

自心佛性、

(付囑第一〇)

と稱謂し各自の心に聖人、佛なる準則の仰ぐべきものが儼存して善惡眞妄を辨知する道德的判斷を爲す根本的指導精神なり。而して良知或は自性に相當する聖人、佛の精明なる靈體は固より

是其靈昭之在人心、亘萬古而無不同、

(全書卷七)

菩提般若之智、世人本自有之、

(般若第二)

三世諸佛十二部經、在人性中、本自具有、

(同上)

とて先天本具のものにして經驗的作爲に依らざる事、王禪兩學相異ならざるなく良知の固有説は佛性常住の旨と等しきなり。かくの如き良知、自性或は般若の智は人々本具個々圓成(此の禪語を用ふ即ち「人人自有個々圓成」(全書卷一))底のものにして此の靈性を聖凡賢愚共に等しく本有すると説くは王禪兩學に於て論なし。

良知良能愚夫愚婦與聖人同、

(全書卷二)

此良知所以爲聖愚之同具、

(全書卷八)

實性者、處凡愚而不減、在賢聖而不增、
(宣詔第九)

而して萬人同一の靈性なるを以て一念開悟せば直ちに聖位に躋り得。

一念悟時、衆生是佛、
(般若第二)

愚人忽然悟解心開、即與智人無別、
(同上)

之陽明が

人皆可以爲堯舜者以此也、
(全書卷八)

とて各人自内存の良知を體認せば即ち堯舜の如き聖人になり得るとする所と相通するべし。

「壇經」に所謂四智即ち大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智と良知との關係を窺見せん。良知は本體論的立脚地よりして萬有一體の平等觀をなすと共に其の中、厚薄親疎の諸相を認めて差別觀をなすを説くが、これ四智の中第二の平等性智(報身)を以て其の差別相を認むる所と通するを覺ゆ。又、平等性智は上述の如く仁愛的同體觀を説く所とも類す。本來良知の昭明靈覺にして萬物を洞照せざる所無きは自性の清淨無垢にして法界に周圍し炳々乎として昭耀せざるなき大圓鏡智(法身)に相當し、或は、良知の自ら生成不息にして物に應じ時處に従ひ變易運行無窮なるは語默動靜上に自性顯現し變化自在の作用をするを稱する成所作智(化身)に類し、或は亦、人欲を去りて純一の天理を存し昭明の良知を致して堯舜の聖位に至れば明鏡の物を照す如く萬境如如の相を具現

するは佛果を得て諸法の實相を觀察して分別心を起さず自性を離れざるを稱する妙觀察智（報身）にも其の意通するを見る。茲を以て良知に於てもかゝる四智を具有すると謂ふべきならん。

良知は元來經驗的知識即ち見聞に因らずして存すると雖も見聞は良知的靈性の用に非ざるなく而して良知は見聞に因りて流滯せられざるも見聞を離るゝ事能はざるなり。見聞は決して學問の大頭腦に非ざるも専ら見聞の未梢にのみ留念せば畢竟第二義に落在せざるを得ず。

良知不由見聞而有、而見聞莫非良知之用、故良知不滯於見聞、而亦不離於見聞……今云、專求之見聞之未、則失却頭腦、而已落在第二義矣……若主意頭腦專以致良知爲事、則凡多聞多見莫非致良知之功、蓋日用之間醜酢雖千頭萬緝、莫非良知之發用流行、除卻見聞醜酢、亦無良知可致矣、
(全書卷二)

此の良知と見聞との關係は禪に於ける真心と見聞覺知との關係に相類する如し。真心は見聞覺知に所屬すると雖も決して見聞覺知を離れず、但、見聞覺知上に於て見解を起し動念すべからざるものとし、亦、見聞覺知を離れて心を求め法を取る勿れと説く。「壇經」に於ては細説せざるも其の意を得しと見るべし。

不離見聞緣、超然登佛地、

(機緣第七)

陽明の提唱する知行合一説は畢竟佛教に所謂「解行雙修」並に「覺行圓滿」の妙旨を表示せしも

の、如くにして禪學に所謂「修證一如」底とも或は

定慧一體、不是二、定是慧體、慧是定用、

(定慧第四)

に於ける定慧一體觀とも相類するとも按ぜらる。逍遙自在の妙用を現せば萬物悉く心の儘に運行せられ「心行平直」(般若第二)の如く總ての行爲は心と一致し心と合一せざる事なきと謂ふべし。これ禪學に於ける心性の合一的活動にして所謂「無心」、「無念」の状態を示せしならん。

陽明が心の本體即ち性の善なく惡なきを説く「全書」卷三に於ける

無善無惡是心之體、

無善無不善性原是如此、

性之本體原是無善無惡的、

等は佛性の非善非惡を説く

慧能云、不思善不思惡、正與麼時、那箇是明上座本來面目、慧明言下大悟、……一者善二者不

善、佛性非善非不善、是名不二、

(行由第一)

の禪旨と相異せざるなきなり。これ陽明が親ら「佛氏亦無善無惡、何以異」(全書卷一)と稱謂する所に徴しても王禪の性無善無惡説の通するを知るに足る。而して此の性の無善無惡とは

即無善無惡是謂至善、

(全書卷一)

とて善惡の對立性を超絶せし絶對的善即ち至上善なるを示せしものなる事分明にして禪學に於ける佛性の至善なる事も論を俟たざるなり。

かくの如く未發の心體は至善即ち無善無惡なりと雖も「有善有惡是意之動」(全書卷三)或は「發用上、也原是_レ可以爲善、可以爲不善的」(同上)とて心意の發動上に於て始めて善惡の別を生起するに至る。これ即ち禪の所謂佛性は無善無不善の至善なるも一念思量の處に於て正邪是非善惡眞妄の相を現じ佛凡の分るゝ所となす旨に類す。

自性起一念惡、滅萬劫善因、自性起一念善、得恒沙惡盡、直至無上菩提……若不思萬法、性本如空、一念思量、名爲變化、思量惡事、化爲地獄、思量善事、化爲天堂、(懺悔第六)

凡夫即佛、煩惱即菩提、前念迷即凡夫、後念悟即佛、前念著境即煩惱、後念離境即菩提、

(般若第二)

此の善惡も或は天理、人欲も同一なる心の作用の合理的なると否とに依りて名を異にすると雖も畢竟兩物あるに非ずして一物に歸す。

先生曰、至善者心之本體、本體上才過當些子便惡了、不是有一箇善卻又有一箇惡來相對、故善惡只是一物、
(全書卷三)

此の「善惡只一物」の説或は

心一也、未雜於人、謂之道心、雜以人僞、謂之人心、人心之得其正者卽道心、道心之失其正者卽人心、初非有二心也、
(全書卷一)

に説く道心(天理)と人心(人欲)との相卽不二の旨は禪の所謂善惡一心、迷悟不二の説と趣を同じくし或は亦

本性無二、無二之性、名爲實性、於實性中、不染善惡、
(懺悔第六)

煩惱卽菩提、無二無別、若以智慧照破煩惱者、此是二乘見解、
(宣詔第九)

の思想とも類する如し。人心、人欲を除去する以外に別に天理を存する功夫あるに非ずして去人欲の處が卽ち存天理であり致良知なり。

若無塵勞、智慧常現、不離自性、
(般若第二)

常自見已過、與道卽相當、
(同上)

無妄想時、一心是一佛國、
(壇經、大應注)

禪に於ても一切の妄情妄念を去りて然る後更に佛性を現前するの功夫あるに非ずして妄滅卽眞現であり煩惱を斷すれば卽ち證得菩提なり。然も此の理を知らざれば、去人欲の外更に「存天理」の功夫を致さんとし「斷滅煩惱」を外にして「證得菩提」の工夫をするに至る。茲を以て陽明或は慧能は諸生に對して懇切に戒むる所以なり。

爾卻去心上尋箇天理、此正所謂理障、

(全書卷三)

何處求真佛、汝等自心是佛、更莫狐疑、外無一物而能建立。

(付囑第一〇)

而して王禪兩學共に吾心を外にして理を求め佛を求むの非を説き斥外求を高唱するなり。

理豈外於吾心邪、

(全書卷二)

不可外心以求仁、不可外心以求義、獨可外心以求理乎、

(全書卷二)

此三身佛從自性生、不從外得、

(懺悔第六)

汝觀自本心、莫著外法相、

(機緣第七)

不見自性、外覓佛、起心總是大癡人、

(付囑第一〇)

陽明の功夫は心を明鏡の如くならしめ一切の執着心を去り心上に生起する好的念頭をも些子を著け得ず總て拘着重滯なからしめん事を要し

應無所住而生其心、

(金剛經、壇經、行由第一所收)

内外不住、去來自由、能除執心、通達無礙、

(般若第二)

若見一切法、心不染着、是爲無念、用卽徧、一切處、亦不著一切處、(同上)

の禪旨と能く通するを見る。人性本來自ら清淨なるに更に心を起して淨に著せば却て妄想なるを免れざるものにして淨縛となり障道となる。

人性本淨、由妄念故、蓋覆眞如、但無妄想、性自清淨、起心著淨、却生淨妄……作此見者、障自本性、却被淨縛、……若著心著淨、卽障道也、
(坐禪第五)

かくの如き些子の情欲を根柢より掃蕩する純一なる工夫ありて始めて微細なる物にも繫縛せられざる活潑々地の妙處が現前し慧能の所謂「不立一塵」底の妙處を得。

心隨萬境轉、轉處實所幽、隨流認得性、無喜復無憂、
(臨濟錄)

若主宰定時與天運一般不息、雖酬酢萬變、常是從容自在、
(全書卷一)

但一切善惡都莫思量、自然得入清淨心體、
(宣詔第九)

上掲の「應無所住而生其心」は元來「金剛經」の語なるが慧能は之に依りて證悟せしが故に「應無所住而生其心」の語と慧能とは不可離的關係を有するもので慧能の思想を検討する上に於ても看過されざる禪語であり禪の公案たり。

陽明は内修的功夫の補助として師友問學の必要を説示して曰く

此事必須得師友時々相講習切劘、自然意思日新、
(全書卷六)

如此亦只是終日與聖賢印對、是箇純乎天理之心、任地讀書、亦只是調攝此心而已、何累之有、

(全書卷三)

と。かく心を調攝して聖賢に印對するには讀書の法に因るべきで師友との問學琢磨と共に致知の自

省的功夫に必須缺くべからざるものなりと雖も唯、主従本末を顛倒せざるを要するのみ。

即須廣學多聞、識自本心、達諸佛理、

(懺悔第六)

不能自悟、須求善知識指示方見、

(般若第二)

古教可照心、

(永平清規、卷下)

王學の内修法と同じく禪學に於ても古教、善知識の教示に因れば見性に一段の功あるべきを説く。然し専ら問學に著せば

口誦心行、即是轉經、口誦心不行、即是被經轉、

(機緣第七)

とて聞見が却て本心を喪ひ唯、口誦して心に修せざるを戒め「諸佛妙理非關文字」(同上)と迄諭し主従の別を失せざるを要す。陽明はかくの如き靜的功夫よりも動的工夫たる事上磨鍊の方法が最も効あるを説く處で禪に於ても二六時中喫茶喫飯運水搬柴の間、否行住坐臥の一切處に於て恒に直心を行じて禪心を失せざらしむ。

道由心而悟、豈在坐也。

(宣詔第九)

一行三昧者於一切處、行住坐臥、常行一直心、

(定慧第四)

佛法在日用處、行住坐臥處、

(大惠普覺禪師書、上)
國譯禪學大成本

畢竟王禪兩學は動靜兩工夫を立し靜時には戒慎し動時には省察し動と靜とは共に致知見性の田地

に非ざるは無きなり。陽明は

動靜一理也、

(全書卷二)

動亦定、靜亦定、

(同上)

動靜合一、

(全書卷四)

とて動中靜、靜中動、即ち動靜一如觀を説くが禪に於ても

動靜常理、成就自然之理、

(修心訣)

靜鬧一如、

(大慧書、上)

動靜無心、

(機緣第七)

と記する如く動靜一如の端的を説く。

陸王の學否儒教の立脚は世間法的にして究極の處、修身齊家よりして治國平天下に至るは論を俟たざるなり。儒教と立場を異にする佛教殊に禪學に於ても

若欲修行、在家亦得、不由在寺、

(疑問第三)

佛法在世間、不離在覺、離世覓菩提、恰如求兔角、

(般若第二)

とて世間法的にして期する處必らず救世濟民に存すべきと雖も概して出世間的に傾向するは否定され得ず。又

恩則親養父母、義則上下相憐、讓則尊卑和睦、忍則衆惡無喧、（疑問第三）

敬上念下、矜恤孤貧、名慧香、（懺悔第六）

とも説くと雖も要するに五倫五常に關しては陸王等の儒家の如く重視せざる處あるを覺ゆ、

次に陽明の四言教と禪思想との關係に就て論述せんとするが本論稿に於ては至極簡明に述べんとす。

四言教第一句に於ける性の本質を表詮する、（無善無惡是心之體」の思想は禪の「佛性非善非不善」（行由第一）に相當し、善惡の起處を説く第二句の「有善有惡是意之動」は「前念迷即凡夫、後念悟即佛、前念著境即煩惱、後念離境即菩提、（般若第二）の旨に通ずるを見る。而して良知の用を説く第三句の「知善知惡是良知」は「觀諸善惡境相、自心不亂」（懺悔第六）とて慧能の思想の根本をなす自性も知善知惡的作用をなさざる無く、第四句の「爲善去惡是格物」は煩惱を斷滅して菩提を證得すると等しく「觀照自心、止惡行善」（懺悔第六）の旨と相類する如し。

此の陽明の四言教の見解に於て漸修頓悟の兩派の意見が生じ錢緒山は心體は無善無惡なるも人には習染心ありて心意の發動上、善惡の別を生起するを以て格物、致知、誠意、正心、修身の功夫に因り性體に復歸するを要すと説き王龍溪は心の本體が無善無惡の至善なれば意知物悉く無善無惡ならざるべしと説く。緒山が提示せし陽明の所謂

無善無惡是心之體、有善有惡是意之動、知善知惡是良知、爲善去惡是格物、(全書卷三)の四言教を漸修的の四有的の四句訣と稱するに對し龍溪が提唱せし

若說心體は無善無惡、意亦是無善無惡的意、知亦是無善無惡的知、物亦是無善無惡的物矣、

(同上)

の四言教を頓悟的の四無的の四句訣と稱す。

此の天泉橋上に於ける陽明と龍溪及び緒山との證道的說話は禪家に於ける五祖弘忍門下の二大龍象たる慧能及び神秀の黃梅山上の問答法並に慧、神の思想的傾向と頗る相似たるを見る。神秀の偈たる

身是菩提樹、心如明鏡臺、時時勤拂拭、勿使惹塵埃、

(行由第一)

は所謂北漸的禪風にして緒山の漸修的手法と其の思想的方面とに於て相通する如し。慧能の偈に所謂

菩提本無樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃、

(同上)

は所謂南頓的禪風にして龍溪の頓悟自然の旨に類する如し。王龍溪と慧能とは共に本體を看取する證悟を先きにし、錢緒山と神秀とは本體を蒙蔽する私欲上に功夫をなすを先きにし、要するに陽明は頓漸兩教を是認し龍溪、緒山の兩說共に各々學問の要として首肯せしが如く、弘忍の慧能

神秀に對する態度も亦然り。頓悟的禪風を帶びし六祖慧能と雖も陽明の態度と同じく

法無頓漸、人有利鈍、故名頓漸、

(頓漸第八)

法即無頓漸、迷悟有遲疾、

(般若第二)

と説示する如く人の利鈍に因りて頓漸の兩教あるを認む。頓漸の兩者共に相應して始めて王禪兩學の眞面目を發揮するを得べし。

陽明思想の殆んど全般に亘りて「六祖法寶壇經」に於ける六祖慧能の禪的思想とに就いて検討せしが陽明學の儒教的立場と禪學の佛教的なそれとは各々自ら趣を異にすると雖も其の思想的方面は勿論、功夫論其の他に於ても王禪兩學全く符を合し揆を一にするものと謂ふを得べきなり。陽明は「良知」を以て彼が思想の根幹として學説を開展せしは、六祖慧能が「自性」を中心的思想として禪風を擧揚し禪旨を唱説せしと同じく其の兩者の根本的な良知と自性との思想的内容は共に相通するを覺ゆ。陽明は龍溪、緒山の兩思想的傾向を自家の學風とせしが、勿論其の重點は龍溪の頓悟自性門的思想に傾向するものにして、六祖慧能の南頓的禪風と顯著に相通する所あるを首肯され得る。此の王禪兩學の思想的關係の論述より考察するも陽明思想が諸禪籍中殊に「六祖壇經」の思想と全く符節を合し、最も密接な關聯を有するものなる所より、且、陳建の所謂

陽明一生講學是尊信達磨慧能、

(學部通辨、續下、五丁、和刻本)

或は陽明自作の「山僧」の詩たる

巖下蕭然老病僧、曾求佛法禮南能、論詩自許窺三昧、入聖無梯出小乘、高閣松風飄夜磬、石床花雨落寒燈、更深月出山牕曙、漱齒焚香誦法楞、

(全書卷二〇)

に於ける「禮南能」及び「壇經」中の語句を巧に轉用する所に徴するも陽明は慧能を私淑尊信して其の禪風、禪旨に心酔し著しく影響を受けしものと思はる。茲を以て蓋し陽明は「六祖壇經」を親しく愛誦せしもの如く、之に依りて思想を鍊成し彼が禪的な思想を益々醸成せしと按ぜらる。其の所謂「禮南能」に就ては蓋し「南能」とは「壇經」に所謂「人皆稱南能北秀」(頓漸第八)に徴し六祖慧能を指示するものにして、其の「南」とは六祖が南方に行化せしに因り、或は慧能の禪風を神秀の北修禪と稱するに對し南頓禪と稱謂するに因るものにして、其の「能」とは勿論慧能の能を示すものなる事首肯され得る。

要するに陽明思想と「六祖壇經」に於ける慧能の禪的思想とは全く符を合するものと謂ふべく陽明が如何に六祖慧能を尊崇し「壇經」を通じて其の禪旨に啓發され鮮からず影響を受けしならんと按ぜらる。以上、

(昭一七、六、二〇、脱稿)